

ボナパルト派とドレフュス事件

湯 浅 翔 馬

I はじめに

19・20世紀転換期のフランスで生じたドレフュス事件（1894-1906）は、第三共和政をゆるがした政治危機のひとつとして知られる⁽¹⁾。事件の経緯は周知であるため、概略だけ示しておく。1894年10月、陸軍参謀本部のユダヤ人アルフレド・ドレフュス大尉（Alfred Dreyfus, 1859-1906）が⁽²⁾、無実のスパイ容疑で捕まり、軍法会議で終身流刑の判決を受けた。翌年初頭に彼は軍籍を剥奪され、3月に悪魔島に流刑となった。無罪を確信するドレフュスの家族が行動を始めるのと並行して、参謀本部「統計局」部長となったジョルジュ・ピカール（Georges Picquart, 1854-1914）は、証拠の誤りと真犯人フェルディナン・ヴァルザン・エステラジ（Ferdinand Walsin Esterhazy, 1847-1923）の存在に気づき、上層部に打ち明けるも沈黙を強いられ、左遷される。1897年、事件が動き始める。6月にピカールが友人の弁護士ルイ・ルブロワ（Louis Leblois, 1854-1928）に詳細を告白し、ルブロワが事件の詳細を上院副議長シュレール＝ケストネル（Auguste Scheurer-Kestner, 1833-1899）に告げ、シュレール＝ケストネルが声明を発表する。11月、エステラジが告発され、12月には調査が行われる。1898年1月、エステラジが軍法会議で無罪になったのち、ゾラ（Émile Zola, 1840-1902）が『ローロール』*L'Aurore* に掲載した記事「私は告発する «J'accuse»」

(1) ミシェル・ヴィノック（大嶋厚訳）『フランス政治危機の100年：パリ・コミューンから1968年5月まで』吉田書店、2018年、173-238頁（Michel Winock, *La fièvre hexagonale. Les grandes crises politiques, 1871-1968*, Paris, Seuil, 1987, pp. 141-191）。

(2) 本来、フランス国籍をもつ人々は「ユダヤ系フランス人」と表記する必要があるが、煩雑さを避けるために本稿では「ユダヤ人」と表記する。

を通じて事件が政治問題化し、証拠の偽造などが明らかになるなかで、ドレフュス派と反ドレフュス派の運動と対立が本格化する。1898年5月の下院総選挙ののち、度重なる内閣の交代と新大統領の就任を経て、1899年6月にヴァルデック＝ルソー（Pierre Waldeck-Rousseau, 1846-1904）を中心とする左派連合の「共和国防衛」政府が誕生する。8月以降、過激な反ドレフュス派の取り締まりが始まるとともに、ドレフュスの再審がレンヌ軍法会議で行われるも再び有罪判決が下される。その直後に大統領令による特赦という高度に政治的な方法により、ドレフュスは釈放された。ドレフュスが破棄院で無罪を獲得したのは1906年になってからだった。⁽³⁾

ドレフュス事件は道徳的問題を提示し続ける歴史的出来事であると同時に、フランス史上の最大の事件のひとつである。反ユダヤ主義、社会主義勢力の共和国への統合、共和派的愛国主義のナショナリズムから排外主義的な右翼のナショナリズムへの転換、「知識人」の政治参加など、さまざまな点で事件の意義が繰り返し強調される。そして、ドレフュス事件期のフランス社会における反ユダヤ主義の浸透や、⁽⁴⁾メディアによるセンセーショナルな報道により、⁽⁵⁾フランスの国論は二分され、サロン、家庭内までをも引き裂いたとされる。一方で、政治史研究者のジョリはこうした見解に疑義を呈する。特に、個人の人権を擁護するドレフュス派と、⁽⁶⁾国家と軍の権威を優先する反ドレフュス派に国論が二分されたという二元論的な見方の限界をジョリは説く。⁽⁷⁾ここではブーランジェ事件⁽⁸⁾という教訓にもかかわらず、改革に失敗した第三共和政の政治体制そのも

(3) ピエール・ミケル（渡辺一民訳）『ドレーフュス事件』白水社、1990年；アラン・パジェス（吉田典子、高橋愛訳）『ドレフュス事件：真実と伝説』法政大学出版局、2021年。

(4) 19世紀末フランスにおける反ユダヤ主義の拡大については以下を参照。Pierre Birnbaum, *Le moment antisémite. Un tour de la France en 1898*, Paris, Fayard, 1998；Gérard Noiriel, *Immigration, antisémitisme et racisme en France (XIX^e-XX^e siècle)*, *Discours publics, humiliations privées*, Paris, Fayard, 2007, pp. 207-253.

(5) ドレフュス事件の報道に関しては以下を参照。Patrice Bousset, *L’Affaire Dreyfus et la presse*, Paris, Kiosque, 1960；Janine Ponty, «“Le Petit Journal” et l’Affaire Dreyfus (1897-1899) : analyse de contenu», *Revue d’histoire moderne et contemporaine*, T. 24^e, No. 4 (Oct.-Dec., 1977), pp. 641-656；鈴木重周「初期ドレフュス事件報道における反ユダヤ主義言説」『ユダヤ・イスラエル研究』30巻、2016年、13-26頁。

の構造的欠陥や穏健派（オポルチュニスト）の無力がドレフュス事件を生じさせた環境として重視される。ジョリの研究が示唆するのは、単に当時の政治勢力や世論をドレフュス派對反ドレフュス派の構図に単純化することなく、それぞれの立場と行動の実態を、当時の政治的文脈を考慮して個別に検証する必要があるということである。ドレフュス事件研究の蓄積は膨大であり、事件そのものの再検証は筆者の手に余る作業である。そこで本論文は、ジョリの提示した視点を踏まえながら、ボナパルト派という当時の一右翼勢力が、ドレフュス事件やそれが引き起こした反ユダヤ主義の過熱にいかに対応したのかを分析することで、ボナパルト派の側からドレフュス事件の一側面を照射したい。

本論に入る前に、ドレフュス事件期のボナパルト派に関わる先行研究を整理しておく。第三共和政期のボナパルト派国会議員のプロソポグラフィ研究を行ったアンドレの博士論文の第1巻では、党派全体の対応が素描されている⁽¹⁰⁾。またジョリによる世紀末の保守派とナショナリストの関係を扱った研究およびドレフュス事件期の緻密な政治史研究では、1890年代のボナパルト派の置かれた厳しい状況が説明され、ドレフュス事件のなかでボナパルト派が観客 *spectateur* でしかなかったことや、慎重なヴィクトル公と行動を求めるグループの対立が指摘される⁽¹¹⁾。「大衆のボナパルティズム」研究者のメナジェのボナ

(6) ドレフュス派については以下を参照。Marie Aynié, *Les amis inconnus. Se mobiliser pour Dreyfus, 1897-1899*, Paris, Privat, 2011 ; Emmanuel Naquet, *Pour humanité. La ligue des droits de l'homme, de l'affaire Dreyfus à la défaite de 1940*, Rennes, PUR, 2014, pp. 43-146.

(7) Bertrand Joly, *Histoire politique de l'affaire Dreyfus*, Paris, Fayard, 2014.

(8) ブーランジェ事件については、ミシェル・ヴィノック、前掲書、111-171頁。

(9) 比較的近年の研究で、事件の全体像を描いた代表的な著作としては以下のものが挙げられる。Vincent Duclert, *L'Affaire Dreyfus*, Paris, La Découverte, 2006 ; Ruth Harris, *Dreyfus. Politics, Emotion, and the Scandal of the Century*, New York, Metropolitan Books, 2010 ; Philippe Oriol, *L'histoire de l'Affaire Dreyfus, de 1894 à nos jours*, Paris, Les Belles Lettres, 2014 ; Bertrand Joly, *Histoire politique de l'affaire Dreyfus*, *op. cit.*

(10) Patrick André, *Les parlementaires bonapartistes de la Troisième République (1871-1940)*, thèse de doctorat (Université Paris IV), 1996, t. 1, pp. 86-90.

(11) Bertrand Joly, *Nationalistes et conservateurs en France, 1880-1900*, Paris, Les Indes Savantes, 2008, pp. 242-247 ; Id, *Histoire politique de l'affaire Dreyfus*, *op. cit.*, pp. 116-117.

パルト派と極右リーグとの関係を検じた研究は、人民投票による国民の和解という神話に立脚するボナパルティズムとナショナリストの排外主義の間には構造的な矛盾があったことを鋭く指摘し、短い論文ながら示唆に富む⁽¹²⁾。しかしこれらの研究では「規律を欠いたボナパルト派」を構成する人々がどのようにドレフュス事件に対応したのかという具体的な行動が不透明である。また「皇位継承者」であるヴィクトル公 (prince Victor Napoléon, 1862-1926) の視点からドレフュス事件期のボナパルト派を扱ったド・ウィットの研究書など、ドレフュス事件と個別のボナパルティストの関わりを描く伝記がいくつか存在する⁽¹³⁾。しかしこれらでは個人レベルにとどまり、それぞれがボナパルト派内でのような位置付けにあるのかが不明である。

これらに対して、本論文は、ポール・ド・カサニャック、ギュスターヴ・クネオ・ドルナノ、ジョゼフ・ラジーなど当時のボナパルト派有力者のドレフュス事件への対応や主張を取り上げ、それらを比較検討する（それぞれの経歴については後述）。彼らを対象とするのは、それぞれボナパルト派内で一定程度影響力を有したと考えられるからであり、また出版メディアを通じて意見を表明したためである。この作業を通じて、「ナポレオン支持者」であり「右翼」であるボナパルティストがいかにドレフュス事件を捉え、行動したのかを新聞記事および警察関連文書、ナポレオン公ヴィクトル宛の書簡から明らかにすることで、同党派内部の「反ドレフュス主義」の内実の多様性を検討したい。

(12) Bernard Ménager, «Nationalists and Bonapartists», in Robert Tombs (dir.), *Nationhood and Nationalism in France. From Boulangism to the Great War, 1889-1918*, London-New York, Harper-Collins, 1991, pp. 219-236.

(13) Lactitia de Witt, *Le prince Victor Napoléon*, Paris, Fayard, 2007, pp. 246-263; Jean-Louis Berthet, *Gustave Cunéo d'Ornano (1845-1906). Le dernier bonapartiste charentais*, Saintes, Le Croît vif, 2013; Thibault Gandouly, *Paul de Cassagnac. L'enfant terrible du bonapartisme*, Versailles, VIA ROMANA, 2018, pp. 235-245. 特にベルテによるドルナノの伝記ではドレフュス事件との関わりに関する記述がほとんどない。

(14) 警察関連文書は、パリ警視庁文書館 (Les Archives de la Préfecture de Police) 所蔵の警視総監宛報告書 (sous-séries BA) および、フランス国立文書館 (Les Archives Nationales) の内務省警察関連文書 (F7) である。またヴィクトル公宛の書簡もフランス国立文書館所蔵の個人文書 (400AP) である。本稿では、パリ警視庁文書館を APP、国立文書館を AN と略記する。

II 世紀転換期におけるボナパルト派の衰退と変化

1880年代末のブーランジェ事件を経て、第三共和政は確立されたといえる。ブーランジェ派との同盟という有利な状況にもかかわらず、王党派を中心とする保守派は議席数を伸ばすことができなかった。王党派にできることは「新たなブーランジェ事件」を待つことのみだった⁽¹⁵⁾。カトリック勢力による共和政への「ラリマン」(ralliement, 加担・同意の意味)の試みはうまくいかなかった一方で、ブーランジェへの加担者を排除することで穏健化した急進派の一部とともに政権を握ったオポルチュニスト(進歩派に名前を変える)は、社会主義勢力という新たな対抗勢力がいたものの、相対的に安定的な立場を得た。ブーランジスムを経て、共和派内部では「憲法改正」はもはや議論にはならず、王朝を主体とする保守派右翼勢力という敗者たちは議会共和政の敵ではなくなったのである⁽¹⁶⁾。

表1 1871年から1902年までの下院選挙におけるボナパルト派の獲得議席数

年	1871	1876	1877	1881	1885	1889	1893	1898	1902
議席数	約20	約100	117	45	65	56	約20	16	15

出典：Bertrand Joly, *Nationalistes et conservateurs*, op. cit., pp. 217-248 より作成。

表1に示したように⁽¹⁷⁾、保守派右翼勢力の衰退のなかでも、ブーランジェ事件以降のボナパルト派の退潮は王党派よりも一層際立つが⁽¹⁸⁾、1890年代のボナパル

(15) Bertrand Joly, *Histoire politique de l'affaire Dreyfus*, op. cit., p. 116.

(16) *Ibid.*, pp. 99-124.

(17) 年によって異なるが総数は、1871年が約640議席で、そのほかはおおよそ530~590議席。

(18) ブーランジェ事件とボナパルト派の関係については、以下の拙稿を参照されたい。湯浅翔馬「ボナパルティスムとブーランジスム：一八八〇年代後半のフランスにおけるヴィクトル派の展開」『史学雑誌』第130編8号、2021年、62-85頁；同「『ナポレオン』と共和政：ブーランジェ事件期のジェローム派の思想と運動」『西洋史論叢』第42号、2020年、31-46頁。

ト派にはそれ以前と比べていくつかの変化が確認できる。まず理念の面では、共和政の確立を経て、ボナパルト派はもはや「帝政再建」を公にはほとんど主張せず、人民投票 *plébiscite* が彼らの主要なスローガンとなった⁽¹⁹⁾。組織的な面では、1880年代のボナパルト派を悩ませ続けた、ナポレオン公ジェローム (prince Napoléon Jérôme Bonaparte, 1822-1891) と、その長男ヴィクトル公の間の皇位継承者問題が、ジェロームの死により解決した。しかし、1890年代以降の議席数の減少により、1870年代から存在したボナパルト派議員団「ラペル・オ・プープル *l'Appel au peuple*」は、1893年以降組織されなくなった。また、1880年代に君主政再建派として王党派との協力を推進したポール・ド・カサニャックの影響力が、1890年代になると保守派の衰退を背景として低下し、ギユスターヴ・クネオ・ドルナノを中心とする「人民投票派 *plébiscitaires*」がパリでは優勢になった⁽²⁰⁾。しかし、皇位継承問題の解決後も、内部では左右の派閥の対立が存在しつづけた⁽²¹⁾。特にドレフュス事件期に関しても、ジョリは個人的な嫌悪感情の問題で、ボナパルト派は団結を欠いたと指摘している。人間関係の問題も確かに存在したが、1890年代に入ってもなお「帝政」や「ナポレオン」はいかなるものかという問題に関してカサニャックとドルナノがそれぞれの新聞の紙面上で論争しているように、政体やその理念をめぐる思想上の根本的な差異があったことも指摘しておきたい⁽²²⁾。さらに、ようやく名実ともに「皇位継承者」となったヴィクトル公は、明確に政治的態度を表明せず、慎重な姿⁽²³⁾

(19) 人民投票というデモクラシーから生じる政体という理念は、ボナパルティズムをその他のフランスの君主政 (ブルボン、オルレアン) と画する重要な理念である。

(20) 1895年、カサニャックが運動を活性化するために、当時の組織の指導者であるジュール・ルグー (Jules Legoux, 1836-1908) に対抗した結果、セーヌ県のコミテ委員長の選挙が行われ、ルグーが勝利している。Patrick André, *op. cit.*, pp. 84-85. しかし1895年12月の警察報告では、ルグーは、パリに存在する40のコミテのうち24が自身に忠実だが、残りはカサニャック派だと述べている。APP, BA887, 7 décembre 1895.

(21) APP, BA887, 29 septembre 1894, 6 avril, 27 et 30 mai, 8 et 27 juillet, et 7 décembre 1895, 16 janvier, 27 mai et 31 octobre 1896, et 21 juillet 1897.

(22) たとえば、カサニャックがオルレアン公の宣言を賞賛した際に、ドルナノがこれに対してナポレオンの帝政とオルレアンの王政に共通点はないと反論している。Paul de Cassagnac, «Un Homme», *L'Autorité*, 20 mai 1896; Gustave Cunéo d'Ornano, «Contre le roi, l'empereur», *Le Petit caporal*, 24 mai 1896.

勢をとり続けることに対する反発が支持者間で常にくすぶっていた。⁽²⁴⁾

こうしたなか、ボナパルト派のなかからはエドゥアール・ドリユモン (Édouard Drumont, 1844-1917)⁽²⁵⁾ とその日刊紙である『リーブル・パロール』*La Libre parole* との協力を求める声が出始める。1892年8月15日に行われたボナパルト派の集会で、カルヴァドス県選出の下院議員であるアンジュラン (Fernand Engrand, 1867-1938) は「今日のフランスは、エドゥアール・ドリユモンという才能ある著述家が指し示す道を歩もうとしているように思う」と発言している。⁽²⁶⁾ この点は他のボナパルティストにも見られる。例えば、カサニャックは、同じく共和政を憎むカトリックの保守派として、そして同じく直接民主制による国家の指導者の選出を求めるものとしてドリユモンに共感を示している。⁽²⁷⁾ 1891年3月には、ドリユモン著作の『ある反ユダヤ主義者の遺言』*Le testament d'un antisémite* を自身の日刊紙『ロトリテ』*L'Autorité* の一面で紹介して、プロモーションに協力している。⁽²⁸⁾ ドレフュス事件期の政界を綿密に検

- (23) 第三共和政期のボナパルト派内部での「再建すべき帝政」像をめぐる対立に関して以下の拙稿を参照。湯浅翔馬「ジュール・アミーグに見るフランス第三共和政初期のボナパルティズムの一側面」『西洋史論叢』第37号, 2015年, 31-45頁; 同「ポール・ド・カサニャックとフランス第三共和政初期における「保守的」ボナパルティズム」『世界史研究論叢』第6号, 2016年, 18-35頁。1880年代に関しては、同「一八八〇年代前半のフランスにおけるボナパルト派の思想と運動：ヴィクトル派の形成と展開」『史観』第178冊, 2018年, 62-86頁。
- (24) 特にロシアに亡命し、軍職に就いていた弟のルイ公 (prince Louis, 1864-1932) を担ぎ上げようとする動きが見られる。APP, BA887, 8 décembre 1893, 15 janvier 1894 et 30 octobre 1896.
- (25) ベストセラーとなった『ユダヤのフランス』(*La France juive*, 1886) で知られる反ユダヤ主義者で、「反ユダヤ主義の教皇」と呼ばれる。宗教的反ユダヤ主義と経済的反ユダヤ主義に、近代的な「人種」論に基づく反ユダヤ主義を接合としたとされる。ドリユモンについてはコフマンの研究が最も詳しい。Grégoire Kauffmann, *Edouard Drumont, Paris, Perrin*, 2008. なお『ユダヤのフランス』に見られる反ユダヤ主義の特徴として、加藤克夫は①融通無碍な人種論, ②陰謀史観と諸悪の根源, ③過去復帰的・伝統的社会観, ④「革命的右翼」の萌芽の4つを挙げている。加藤克夫「E. ドリユモン『ユダヤ人のフランス』を読む：一九世紀末「もう一つのフランス」の一断章」『立命館言語文化研究』第8巻2号, 1996年, 41-72頁。
- (26) *Le Figaro*, 16 août 1892.
- (27) Paul de Cassagnac, «Réponse à un soi-disant catholique», *L'Autorité*, 9 février 1894; Id., «Un plébiscite», *L'Autorité*, 17 mai 1894.
- (28) Paul de Cassagnac, «Le Nouveau livre de Drumont», *L'Autorité*, 20 mars 1891.

討したジョリが、当時のボナパルト派には指導者も規律も結束もなく、「反ユダヤ主義にとっておあつらえむきの獲物だった」と指摘するように、共和派と共和政に決定的に敗れ、ナショナリストの台頭により人民投票の理念が独占物ではなくなってしまったボナパルト派は、「敗者を慰め、その失敗の責任を免除する」反ユダヤ主義に傾倒したといえる。

ただし、他の多くの政治党派や組織と同様に、反ユダヤ主義の内実や程度はさまざまである。実際カサニャック自身も「カトリックを抑圧し、迫害するために共和政を利用しているユダヤ人を嫌っている」として、好意的にドリュモンの著作を紹介する。しかし、ドリュモンの手法には一定の留保がつけられる。

「いたるところに、さらにはいないところにまでもユダヤ人を見るのはドリュモンの偏執 *manie* である。最もこの民族に縁遠い人々さえも、ヤートル [ユダヤ人の蔑称] に変えてしまう病に彼は罹っているようだ。この癖は偏執症 *monomanie* にまで達している。」⁽³¹⁾

ここでカサニャックはカトリックの聖職者までもユダヤ人の手先であると批判するドリュモンの過剰さを指摘している。これに対するドリュモンからの応答に、カサニャックは「あなたにはただひとつの欠点しかない。しかし、それは大きな欠点なのだ。述べよう。あなたは自分の陣営に向かって引き金を引いているのだ」と返答した。⁽³²⁾別の記事でも、「ユダヤ人をあまりに憎み、あまりに彼らを罵るがために、あなた [ドリュモン] はどこにいてもユダヤ人から見る、そしてどこにいてもユダヤ人を見るという病にかかっている」と指摘しているように、⁽³³⁾ドリュモンへの共感を表明する一方で、一定の距離を取ろうとす

(29) Bertrand Joly, *Histoire politique de l'affaire Dreyfus*, op. cit., 116-117.

(30) *Ibid.*, p. 111.

(31) Paul de Cassagnac, «Le Nouveau livre de Drumont», *L'Autorité*, 20 mars 1891.

(32) Paul de Cassagnac, «Une lettre de M. Drumont», *L'Autorité*, 24 mars 1891.

(33) Paul de Cassagnac, «Les juifs et l'anarchie», *L'Autorité*, 3 mai 1894.

る姿勢もカサニヤックには見られる。⁽³⁴⁾ またボナパルト派日刊紙『プチ・カポラル』 *Le Petit caporal* も、ドリユモンの『ユダヤのフランス』(1886年)に関する記事で、「ユダヤ人の侵略からフランスを守る」というこの著作の目的は、「私たちが多くの記事で目指してきたことである」として、「主張は正当である」とする。しかし、同紙は、ユダヤ人の侵略からフランスを守っているカトリックや保守派ジャーナリストまでも批判するドリユモンの「行き過ぎ」を批判し、「このレベルにまで達した不寛容は狂信 *fanatisme* と呼ばれる。非理性的な憎しみが、あなた [ドリユモン] に真実の境界を何度か越えさせてしまっている」と評した。⁽³⁵⁾

ブーランジェ事件の前後で、ボナパルト派内で反ユダヤ主義的傾向が表れ始めることは事実である。しかし、それは必ずしもボナパルト派にとって主要な問題ではなかった。⁽³⁶⁾ むしろ、ドレフュス事件がボナパルト派たちに反ユダヤ主義と、とりわけそうした排外主義的言説を振り撒くナショナリストという新たな右翼といかに対峙するかを突きつけといえる。そしてこの問題は、後述するように、規律を欠いたボナパルト派内での方針の差異を露呈させることになる。それと同時に、ジョリの指摘するようにドレフュス事件は、王党派と同様に敗者であったボナパルト派にとって、ブーランジェ事件以降の沈黙と停滞から脱出し、行動を起こすための絶好の機会として見えるようになるだろう。

(34) ドリユモンの『フルミーの秘密』(1892年)に関しても、全体としては称賛しつつも、「私たちはいつも彼の味方というわけではないし、彼にはしばしば賛同しかねることもある。しかし、私たちはその勇気と誠実さを感心している」とも評している。Paul de Cassagnac, «Le secret de Fourmies», *L'Autorité*, 17 février 1891. 『フルミーの秘密』に関しては、加藤克夫「反ユダヤ主義の教皇」E・ドリユモンとフルミー事件(一八九一年): 一九世紀末フランスにおける反ユダヤ主義の一断章』『立命館史学』第39号, 2018年, 75-100頁。

(35) «Les dangers du fanatisme», *Le Petit Caporal*, 24 avril 1886.

(36) *Ibid.* なおこの時期の『プチ・カポラル』はボナパルト派のなかでも保守的立場だった。

(37) 第三共和政期の反ユダヤ主義については、議会に関する以下の論文が参考になる。Laurent Joly, «Antisémites et antisémitisme à la Chambre des députés sous la III^e République», *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, T. 54^e, No. 3 (Jul.-Sep., 2007), pp. 63-90.

Ⅲ ドレフュス事件下のボナパルト派

ここからは、ボナパルト派とドレフュス事件の関係をポール・ド・カサニャック、ギュスターヴ・クネオ・ドルナノ、ジョゼフ・ラジーという、当時のボナパルト派では一定程度影響力をもったと考えられる3名の政治家・ジャーナリストに焦点を絞って考察する。また時期に関しては議論や運動が最も過熱した1898年から1900年に限定する。それは1894年10月のドレフュス逮捕と翌年1月軍籍剥奪の時点では、ドレフュスの親族などを除いて、彼の無罪を信じるものはほとんどいなかったからである。クレマンソー（Georges Clémenceau, 1841-1929）やジョレス（Jean Jaurès, 1859-1914）のようなのちの「英雄的な」ドレフュス派もドレフュスの有罪を疑っておらず、「裏切り者」として批判したことは周知のことである。

はじめに、ボナパルト派とドレフュス事件の関わりの全体像を外観したい。まず、ほとんどのボナパルト派は反ドレフュス派だった。しかし、亡命中の「皇位継承者」のヴィクトル公は「ナポレオンの伝統」に反ユダヤ主義が入り込むことを望まなかった。実際、1898年にヴィクトル公は、ドレフュス事件に関するいかなる集会も開かないこと、そして「くたばれユダヤ人！ À bas les juifs」とは叫ばないように当時のセヌ県(38)の組織の委員長ルゲー（Jules Legoux, 1836-1906）に通達を出している。ヴィクトル公自身は、ドレフュスは無罪であろうと考えていたが、ドレフュス派の反軍事的主張を危惧していた。しかし、前述のようにボナパルト派の統率を彼は取れなかった(39)。ボナパルト派議会グループも不在で、議会ではカサニャックやラジーなどのボナパルト派議員がドリュモンを中心とする約30名の反ユダヤ主義グループ(40)に属している。さらに、

(38) Patrick André, *op. cit.*, t. 1, p. 86.

(39) Laetitia de Witt, *op. cit.*, pp. 246-263.

(40) ただし、この反ユダヤ主義の議会グループは、旧ブランキ派やボナパルト派、王党派などの反体制派が「反ユダヤ主義」に集結した雑多なグループであり、明確な集団だったわけではない。また活動自体も低調で、大きな影響力はなかった。Laurent Joly, *op. cit.*, pp. 72-76.

ボナパルト派のなかには、ポール・テルレード (Paul Déroulède, 1846-1914) 率いる愛国者同盟 *Ligue des patriotes*⁽⁴¹⁾ や、反ユダヤ主義組織に参加して過激な反ドレフュス派と関わるもの⁽⁴²⁾、受動的に反ドレフュス派の運動に加わるもの、それらとは距離を置きつつもドレフュス事件と絡めて現体制の欠陥を批判するものなど、まとまりを欠いた運動が展開されることになる⁽⁴³⁾。

またドレフュス事件期の政治的混乱により、後述するようにボナパルト派内でクーデタや示威行動が議論され、警察当局は同党派に対する監視を強化した。ド・ウィットの研究が示すように、ボナパルト派の内部からヴィクトル公に対して、1898年から1899年にかけて行動を起こすように要請が繰り返されたが、ヴィクトル公は動かなかった。ドレフュス事件へのヴィクトル公の態度は、1899年末にナポレオン・ボナパルトの生地コルシカ島のアジャクシオで開催された統領政府 100 周年を祝う行事の開催に向けて、アジャクシオ市長に宛てた以下の声明に端的に現れている。

「アジャクシオの街は統領政府 100 周年を祝おうとしている。[…]

今日から 100 年前、フランスはばらばらに引き裂かれていた。

総裁政府には権威も、力も、威光もなく、国内の秩序を維持することすらできなかった。[…]

ボナパルト将軍が現れた。国全体が彼を喝采し、満場一致の票で、運命の管理を彼に任せた。

4 年間ですべてが様変わりした。民法典が発布され、財政は再建され、公教育は何もなかったところから創り出され、その信仰が何であれ良心の

(41) 反独ナショナリズムを掲げて、議会共和政に抗した共和派のナショナリスト。詳しくは以下を参照。Bertrand Joly, *Paul Déroulède. L'inventeur du nationalisme*, Paris, Perrin, 1999; 渡辺和行「対独復讐と人民投票的ナショナリズム：愛国者同盟」福井憲彦編『結社の世界史 3：アソシアシオンで読み解くフランス史』山川出版社、2006年、203-217頁。

(42) *Le Petit Caporal*, 25 et 28 novembre 1898, 12 juillet 1899 et 14 mai 1900; AN, 12868, l'année 1899.

(43) Bertrand Joly, *Histoire politique de l'Affaire Dreyfus*, op. cit., pp. 244-245.

自由がみなに保証された。私たちの統治および行政機構は、1世紀の試練を経てほとんど完全無欠なまま生き延びたと言えるほど正確に創り出された。私たちの統治および行政機構は、革命や恐ろしい災難を超えて、祖国フランスの一体性を維持してきた。

第一統領は物質的秩序を再建するだけで満足しなかった。その行動によって、その断固たる意志によって、人心に平和をもたらした。[…]

勝者と敗者、追放するものとされるものの中で、彼は各々が国になしえる奉仕によってのみ評価した。過去を顧みず、それぞれの才と能力の範囲で、各々が自身の場所を見出す政府を彼は建設した。[…]

人民の選挙によって生まれた第一統領には、党派を考慮する必要はなかった。

人民によって選ばれた第一統領は、人民にだけ身を捧げなくてはならなかった。[…]

人心を動揺が支配するとき、敬意を必要とするものに何ら敬意が払われないとき、祖国への崇拜をここに抱くものにとって、今世紀の初めに立ち戻るのは安らぎである。

ナポレオンは、その至高の公正さでもって、フランスをフランス自身と和解させたのだ。

あなた [アジャクシオ市長] のパトリオティスムにおいて、あなたがとりわけ祝福することを望んだのは、この国民の和解の功績である。

わたしは遠くからこれを祝福し、あなたと団結する。

私は、影響のない言葉や、無益な示威行動で国を揺さぶることを望んだことは決してなかった。[…]

私は心から、国民の和解の時期だと呼びかける。この救済の功績に専念することは、第一統領の伝統に、皇帝がその家族に託した伝統に忠実であるということである。⁽⁴⁴⁾

(44) «Lettre du prince Napoléon à M. le maire d'Ajaccio», *Le Petit caporal*, 24 décembre 1899. なおこの声明はポスターとしても印刷されている。AN, F7 12867.

ヴィクトル公はドレフュス事件そのものには言及しないものの、「人の精神を動揺が支配するとき」、「敬意を必要とするものに何ら敬意が払われないとき」という表現はドレフュス事件による政治的混乱や軍隊の権威の低下への懸念である。そして、その解決策の示唆として、安定的な統治機構の整備や、党派や信仰の違いを超えて国に「国民の和解」をもたらしたというナポレオンの功績を讃えるという構造をとっている。しかし、あくまでヴィクトル公は行動するつもりはない。こうしたヴィクトル公の態度は、規律を欠いたボナパルト派内では一部の不満を掻き立てた⁽⁴⁵⁾。実際、以下で検討していくように、ドレフュス事件と反ユダヤ主義へのボナパルト派の対応は、まとまりも規律も見られないものとなった。

3-1 ポール・ド・カサニャックの事例

ポール・ド・カサニャック (Paul de Cassagnac, 1842-1904) は保守的なボナパルティストとして知られる。ジュール県を基盤とし、長く下院議員として活動したほか、1860年代末～1880年代前半までは『ル・ペイ』*Le Pays* の、1880年代後半以降は『ロトリテ』の主幹として、時に過激な言論で名を馳せたジャーナリストでもあった⁽⁴⁶⁾。彼は1870年代には明確に帝政再建論者だったが、1880年代に入ると、君主政派の衰退と共和政の確立を背景として、君主政を再建するならば、帝政でも王政でも構わないと宣言するようになった。彼は明確な「ボナパルト派」としては振る舞わなくなるが、時期にも依るものの依然として同党派内に影響力を保持し続けた⁽⁴⁷⁾。

保守派のポール・ド・カサニャックのドレフュス事件の対応は、ガンドリの伝記にも描かれているように揺れ動いた⁽⁴⁸⁾。まず確認しておきたいのは、カサ

(45) ヴィクトル公自身はこの声明の評判は良いと述べ、フランスは平穏を求めているのだと警察関係者に答えている。AN, F7 12867, 19 janvier 1900.

(46) 前掲拙稿「ポール・ド・カサニャックとフランス第三共和政初期における「保守的」ボナパルティズム」。

(47) 前掲拙稿「ボナパルティズムとブーランジスム」。

(48) Thibault Gandouly, *op. cit.*, pp. 235-245.

ニャックはユダヤ人を敵視し、ドレフュス派を非難したことである。例えば、「私は弾劾する」の記事でゾラが有罪判決を受けたことに対して、カサニャックは裁判官に対して「フランス全体が、真のフランスが、愛国者のフランスが、信仰し、労働し、戦うフランスが、あなたたち〔裁判官〕を徹底的に喝采している」と賞賛する。そして「ユダヤ人に呪われたゲットー、ヴェネツィア人のゾラに監獄、軍隊に名誉」というそれぞれを然るべき位置に配置する判決だと言う。また、カサニャックは「ユダヤ人は、近代デモクラシーの多数派の法則を侵し」⁽⁴⁹⁾ていると述べ、「もともからいるキリスト教徒の多数派を、外から来た少数派に隷属させている」として、「ユダヤの危機」⁽⁵⁰⁾を主張する。このようにユダヤ人が少数派であるにもかかわらず、国内でカトリック信者よりも大きな影響力をもっているとカサニャックは懸念を表明するのである。

ただし、彼はユダヤ人の追放や抹殺の主張を極端だとして退ける。カサニャックにとって問題はあくまで、現状を招いている共和政そのものにあり、その解決のためにはこれを打倒するしかない。⁽⁵¹⁾カサニャックにとってドレフュス事件は、共和政がフランスに招いた危機だった。1898年末、彼は「真の内戦が最終的な対外戦争に付け加わり」、「国内の無国籍者 *sans-patrie* と国外のイギリス人が祖国フランスの分裂と無力化、治癒不可能なデカダンスへと導こうとしているようだ」として、「フランスの世論がこれほどまでに未来を悲観したことはない」と述べる。それは、ドレフュス事件を契機に、戦争になった際に兵士たちが、彼らを指揮する将校を「侮り、憎む」状況になってしまっているからである。そして、そのことを諸外国は理解しているとして、軍隊の威信の低下をカサニャックは危ぶむ。「道徳の崩壊が毎日進み、国民 *nation* は共和政 *régime républicain* の有害な行動のもとで腐敗した状況に陥っている」。しかし、「共和政の改善はもはや打開策とはならず」、「悪は不治のものとなった」。もはやオルレアン公（王政）か、ヴィクトル公（帝政）か、あるいはナショナ

(49) Paul de Cassagnac, «Au jury», *L'Autorité*, 25 février 1898.

(50) Paul de Cassagnac, «Le péril juif», *L'Autorité*, 26 décembre 1898.

(51) *Ibid.*

リストが行動するよりほかにフランスは救済されえず、カサニャックはそのうちの誰であれ、祖国を救うために最初に行動したものを支持するように訴える。⁽⁵²⁾

このようにカサニャックは反ドレフュス派であり反ユダヤ主義者である一方で、ドリュモンのようなそれではない。実際、しばしばドレフュス事件史でも語られるように、カサニャックはドレフュスの裁判への疑念をはじめに表明した人物のひとりでもあった。⁽⁵³⁾ 1897年11月の時点で「私はユダヤ人が好きではない。しかし、人がユダヤ人だから国を裏切ることができるというのは理由にはならない」と述べ、「実際に納得したうえで、正統に有罪判決を受けるためには、ドレフュスは、今度は情報を得て、注意深く見守る世論の前で新たに裁かれなくてはならない」として、⁽⁵⁴⁾ 非公開の軍法裁判を非難し、ドレフュスの再審を支持している。彼は、右翼のなかでも歯に衣着せぬ論争で名の通った人物であり、1898年～1902年の下院の任期中はドリュモンと同じグループに属した。しかし、証拠の真偽や裁判の公正さについて常にためらいを表明した。1898年9月、ドリュモンに対して、カサニャックは「私は自分自身で認めている。驚きとぬかるみに満ちたこの不安定な問題に関して、私はひどくためらいながらおぼつかない足取りで歩いている自分を感じていることは確かだ」と述べ、⁽⁵⁵⁾ ドリュモンと距離を取る。また証拠を偽造したことを自白したのちに自死したユベール・アンリ (Hubert Henry, 1846-1898) の寡婦と子どもへの寄付 (通称『モニュマン・アンリ』) になぜ協力しないのかと読者から尋ねられたカサニャックは以下のように返答する。

「もし私が『リーブル・パロール』のように考えないことがあったとしても、自由、宗教、祖国の問題が世論に提示されているあらゆる状況において、『ロトリテ』と『リーブル・パロール』は、互いを評価し、愛しあい、

(52) Paul de Cassagnac, «Qui?», *L'Autorité*, 28 décembre 1898.

(53) ミシェル・ヴィノック, 前掲書, 189頁。

(54) Paul de Cassagnac, «L'affaire Dreyfus», *L'Autorité*, 2 novembre 1897.

(55) Paul de Cassagnac, «À Monsieur Drumont, député, Directeur de la *Libre parole*. Simple réponse», *L'Autorité*, 28 septembre 1898.

ともに戦う戦友として、足並みを揃えていることを私は忘れないだろう。

それはさておき、簡潔に私の意見を要約する。

アンリ中佐に私はいかなる同情も覚えない。

証拠偽造者や自殺者に同情することなど私には不可能である。

文書偽造がいかなるものであろうと、どれほど情状酌量すべきように見えたとしても、市民として文書偽造は犯罪であると断言する。

カトリックとして、自殺した人間を、罪を償い、贖う勇気のない人間を顧みることはない。[…]

最も賞賛に値する目的さえも犯罪を正当化することはない！⁽⁵⁶⁾

このキャンペーンを開始したドリユモンと目的は同じであるとしつつも、証拠を偽造したアンリを擁護できないと述べるカサニャックは、軍隊の威信が揺らぐことを許さないし、ユダヤ人に代表される「よそのもの」への警戒も説く。ドレフュス派と反ドレフュス派の戦いでは、反ドレフュス派に与する。しかし、ナショナリストの反ドレフュス派とは一定の距離があった。個人よりも国家(軍隊)の威信を優先したとしてアンリを賛美するシャルル・モーラス (Charles Maurras, 1868-1952) とは異なり⁽⁵⁷⁾、カサニャックはアンリを断罪する。それと同時に、共和国を攻撃し、君主政の再建を謳うカサニャックは、ドレフュス派を激しく非難する。こうしたカサニャックの姿勢は、ドレフュスがユダヤ系であるという理由で排外主義的言説を振り撒くナショナリストとは異なるのである。⁽⁵⁸⁾

(56) Paul de Cassagnac, «À propos d'une souscription», *L'Autorité*, 27 décembre 1898.

(57) 深澤民司『フランスにおけるファシズムの形成』岩波書店, 1999年, 155-156頁。モーラスについては同書の第3章「シャルル・モーラスの君主主義とアクション・フランセーズ」(149-182頁)を参照。

(58) この点で、1890年代前半までのカサニャックの政治思想を検討したオッフエンによる、19世紀的な保守主義と20世紀のナショナリストの間にいるカサニャックの「架橋的性格」の指摘は示唆的である。Karen M. Offen, *Paul de Cassagnac and the Authoritarian Tradition in Nineteenth-Century France*, New York & London, Gardland Publishing, 1991.

3-2 ギュスターヴ・クネオ・ドルナノの事例

ギュスターヴ・クネオ・ドルナノ (Gustave Cunéo d'Ornano, 1845-1906) は、第三共和政期のボナパルト派左派のジャーナリストで、シャラント県選出の代議士 (1876-1906) としても知られる。⁽⁵⁹⁾ 1879年の皇太子の死によるボナパルト派の内部分裂では、当初共和派的なナポレオン公ジェロームを支持していたが、1880年代半ばにヴィクトル公を支持するようになった。ブーランジェ事件期以降、帝政再建ではなく、「人民投票型の共和政」を主張した代表的なボナパルト派左派の人物である。⁽⁶⁰⁾ ドレフュス事件期にはパリの日刊紙『プチ・カポラル』の主幹を務めていた。ドルナノもまたカサニャックと同じように反ドレフュス派である。彼はゾラの有罪判決について以下のように断言する。

「ポルノ作家ゾラはこうして1年の服役に処された。[…]

ここで私たちは宗教的な論争に立ち入らない。私たちはドレフュス大尉が裏切ったのだと考えるが、彼がユダヤ人であるかどうかとか共和派であるかどうかには関心はない。ユダヤ人や共和派の一部は、この裏切りものと連帯するという大きな過ちを犯した。社会主義者たちは、牧師やラビの支援を追い求めたり、受け入れたりすることで、力が得られると考えているのだろうか？

1日ぐらいいは放っておこう。この状況下でよく考えたセーヌ県の裁判官と、パリの群衆と、叫ぼうではないか。『軍隊万歳！ 祖国万歳！』⁽⁶¹⁾

ドルナノはゾラをポルノ作家と批判し、ドレフュスが裏切りものであると非難する。同様に、ドレフュス支持者を罵り、軍隊とそれが体現する祖国に賛辞

(59) ドルナノの生涯については、Jean-Louis Berthet, *op. cit.* その思想的特徴に関しては、Jean El Gammal, «La République vue par un parlementaire bonapartiste à la fin du XIX^e siècle», *Parlement [s], Revue d'histoire politique*, 2014/3 (n° 22), p. 177-183.

(60) 拙稿「帝政と共和政：1880年代フランスにおけるジェローム派の思想と運動」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第64輯，2019年，615-630頁。

(61) Gustave Cunéo d'Ornano, «Vive l'armée !», *Le Petit caporal*, 26 février 1898.

を送る。しかし、ドレフュス個人の問題には立ち入ることを避けると言明する。この点は、ドルナノによる「ナポレオン」と反ユダヤ主義の位置付けに関わる。実際、ドルナノの姿勢は、ユダヤ人の「同化」を脅威とする反ユダヤ主義者とは一線を画すものである。1898年12月、ナポレオンと少数派の問題についてドルナノは以下のように表明する。

「私たちは、ナポレオンの旗を反ユダヤ主義の口論に巻き込むことはできない。しかしながら、カトリック信者に敵対して、ユダヤ人のためにだけ、1889年〔原文ママ、おそらく1789年の間違い〕に私たちの父がすべてのフランス人のために獲得したつもりだった自由の享受を擁護しなければならぬとも私たちは考えない。〔…〕

きっと、アルジェリアの反ユダヤ主義が問題だった。⁶²しかしフランスにおいても同じ情熱が広がっている。〔…〕

これは共和国自身に、現在の寡頭的共和国に、この寡頭政が必然的にもたらす無秩序に、原因があるのだ。

〔強力な〕政府が存在しない場合、活動的な少数派が、普通選挙では大した影響力を持ちえないその数と比較して、より目立つ役割を担う。〔…〕

こうして、フリーメーソンのロッジ、プロテスタントやユダヤの少数派が、一般的にブルジョワ階級を意のままにする。そして、ブルジョワジーがすべてを意のままにするときには、〔フリーメーソン、プロテスタント、ユダヤが〕すべてを意のままにする。これが現在の共和国の寡頭的体制である。〔…〕

反対に、ナポレオンにとって、カトリシズム、プロテスタンティズム、ユダイズムは、人間精神（*âme humaine*）の堂々たる表明である。彼はこれらすべての宗教を保護する。ユダヤ人をフランスに、近代的秩序に、私

(62) アルジェリアはフランス本土とは異なり、反ユダヤ主義の過激化が顕著であり、死傷者を出す事態まで加熱した。アルジェリアの反ユダヤ主義については以下を参照。Pierre Hebey, *Alger 1898. La grande vague antijuive*, Paris, NiL éditions, 1996.

たちの旗に、私たちの栄光に、結びつけたのが偉大なる皇帝ナポレオンである。[…]

このように、世俗の権力が強力である限り、政府が人民投票の権威に基づいている限り、国民全体が、1千万もの票により、すべてを意のままにする限り、少数派は全体の中に消え、カトリックより大きな影響力を持つことはない。すべては国民に吸収される。少数派は支配的ではないものの、権威と平等からなるこの人民投票型の体制のなかで安心して、穏やかでいられる。⁽⁶³⁾」

ここでドルナノは少数派（フリーメーソン、プロテスタント、ユダヤ人）が実際の数よりも影響力を持ち、フランス国民の大多数であるカトリックの利益を侵害していると主張する。しかし、彼にとってその原因は目下の議会共和政の寡頭制的性格である。フェリクス・フォール大統領（Félix Faure, 1841-1899）の死に関する記事でドルナノは「我々を脅かすデカダンスの原因はドレフェス事件ではない。原因は政府にある。苦しいものであろうが全体としては平凡な事件を然るべき場にとどめておくことができず、祖国の発展に対するあらゆる敵の恐ろしい武器にしてしまった」と述べる。⁽⁶⁴⁾そして、ナポレオンの名の下での変革を求める。「党派の人間ではなく、国民の人間である」ナポレオンは、現体制が欠いている権威、団結、社会の再編成、パトリオティズムの象徴である。そして「あらゆる意見を統合し、あらゆる要求を要約する」ものとして、ナポレオンは今最も必要とされる人物に位置付けられる。⁽⁶⁵⁾このことは、人民投票のような国民の意思を実現する理念や政策を欠き、全体の中に少数派を「同化」することができない現体制の無力への批判へとつながる。⁽⁶⁶⁾

実際、ドルナノは、ドレフェス事件による政治的混沌を「人民投票」による国民の和解の理念を体現するボナパルト派が行動を起こす機会として捉えた。

(63) Gustave Cunéo d'Ornano, «Napoléon et les juifs», *Le Petit caporal*, 26 décembre 1898.

(64) Gustave Cunéo d'Ornano, «L'Évolution des masses vers Napoléon», *Le Petit caporal*, 17 février 1899.

(65) *Ibid.*

1898年12月初頭の集会で、彼は「街頭での戦闘と行動的な帝政派の側から生じる行為の企ての前夜にいる」と述べ、デルレードやジュール・ゲラン (Jules Guérin, 1860-1910)⁽⁶⁷⁾ が率いる反ドレフュス派と、ドレフュス派の戦闘の結果死者が出るような事態のなかで、ヴィクトル公が行動を起こす計画があると発言している。⁽⁶⁸⁾ 1899年2月以降、ドルナノはヴィクトル公にドレフュス事件の混乱に乗じて何らかの行動を起こすことを何度も打診している。⁽⁶⁹⁾ この時期の書簡や警察文書からドルナノたちが、パリで政治的アピールを大々的に行う計画を立てていたことが確認できる。この計画は、アルコレやロディの戦場の小さな伍長 (petit caporal) を描いたカラー印刷ポスターを掲示すること、⁽⁷⁰⁾ ヴィクトル公のメダルを製造すること、『プチ・カポラル』のタイトルを叫びながら売り歩く行商の導入、同紙のカラー挿絵入りの日曜版を発行すること、事務所を大通りに構えてシネマトグラフなどの新奇性のある発明や照明を用いてナポレオンの業績をパリ民衆にアピールすることなどで成り立っており、1日1,000フランの支出が必要になると述べている。⁽⁷¹⁾ ドルナノによると、カサニャックの『ロトリテ』やドリユモンの『リーブル・パロール』が繰り返す「くたばれユダヤ

(66) 実際、ナポレオンの第一帝政は、ユダヤ人の「同化」と「フランコ=ユダイズム」の基礎が確立された時期にあたとされる。加藤克夫「第一帝政とフランス・ユダヤ人：「同化」イデオロギーと長老会体制の確立」『社会システム論集：島根大学法文学部紀要』第8号，2003年，23-47頁。フランスにおけるユダヤ人の歴史については、菅野賢治『フランス・ユダヤの歴史』上下巻，慶應義塾大学出版会，2016年。

(67) 1899年の8月から9月にかけての立て籠もり事件 Fort Chabrol を起こした反ユダヤ主義ナショナリストとして著名なゲランは、反ユダヤ主義同盟を再建した一方で、もともとは詐欺師だった。またメンバーには秘密で王党派から買収されていた。詳しくは以下を参照。Bertrand Joly, *Dictionnaire biographique et géographique du nationalisme français (1880-1900)*, Paris, Honoré Champion, 2005, p. 19, pp. 188-189; Id., *Nationalistes et conservateur, op. cit.*, pp. 270-280.

(68) APP, BA907, 9 et 20 décembre 1898. なおこうした計画やそれに必要な資金の要請をヴィクトル公から拒否されている。APP, BA 907, 17 janvier 1899.

(69) AN, 400 AP 183, Lettre de Gustave Cunéo d'Ornano au prince Victor Napoléon, 9 février 1899.

(70) アルコレおよびロディはナポレオン率いるフランス軍がオーストリア軍を破った戦地の名前。

(71) AN, 400 AP 183, Lettre de Gustave Cunéo d'Ornano au prince Victor Napoléon, 10 février 1899.

人」や「くたばれ共和国！」と叫ぶだけの「ネガティブ」な政策はすぐに不十分になる。そして、彼らのようなオルレアン派ともボナパルト派ともつかない人物ではなく、ボナパルト派であると信頼に足る人物の支援のもとで、ナポレオンの騒乱 (agitation napoléonienne) を開始し、パリで「大衆という大海に錨を下ろす」必要があるとヴィクトル公に持ちかける。この計画はその立案者のひとりである議員ナポレオン・マーニュ (Napoléon Magne, 1865-1933)⁽⁷²⁾ の名前から「マーニュ・プラン」(plan Magne) と呼ばれた。またドルナノは慎重なヴィクトル公にこれらの行為は全て合法であると念押ししている。

しかし、これをヴィクトル公は受け入れなかった。2月の大統領フェリクス・フォールの予期せぬ死去の際にも、何もできず、何かする雰囲気すら醸し出すことができなかったとドルナノは非難混じりに悔いている⁽⁷⁴⁾。さらにはヴィクトル公に対しても「かくして全ての事件を、ひとつひとつ、過ぎゆくままにしてみました。公然で決定的な放棄を表明するためのようでした。すぐさまパリで何らかの行動をしなければ、終わりです。決定的に終わりです。私は恥ずかしさを感じ始めています」とまで進言しているほか⁽⁷⁵⁾、ナポレオン・マーニュは『プチ・カポラル』をはじめとするプロパガンダ活動の資金を集めるための新たなコミテの創設をヴィクトル公に許可するように求めている⁽⁷⁶⁾。

さて、ここで注目したいのはドルナノが打診した「マーニュ・プラン」に「反

(72) AN, 400 AP 183, Lettre de Gustave Cunéo d'Ornano au prince Victor Napoléon, 11 février 1899.

(73) ボナパルト派のナポレオン・マーニュは、第二帝政期の財務大臣ピエール・マーニュ (Pierre Magne, 1806-1879) の孫であり、父のアルフレド・マーニュ (Alfred Magne, 1834-1878) はドルドーニュの県会議員だった。名前に表されるように、ナポレオン支持者の家庭で育ったナポレオン・マーニュは、1897年に軍隊勤務を辞め、1898年にドルドーニュ県会選挙および下院選挙で当選した。Jean Jolly (dir.), *Dictionnaire des parlementaires français. Notices biographiques sur les ministres, députés et sénateurs français de 1889 à 1940*, Paris, PUF, 1960, t. VII, pp. 2330-2331.

(74) APP, BA907, 7 mars 1899.

(75) AN, 400 AP 183, Lettre de Gustave Cunéo d'Ornano au prince Victor Napoléon, 17 février 1899.

(76) AN, 400 AP 200, Lettre de Napoléon Magne au prince Victor Napoléon, 28 février 1899. 1899年春には実際にコミテの設立がなされたが、その後の運動は発展したとは言い難い。APP, BA887, 2 avril 1899.

ユダヤ主義」の明確な表明は入っておらず、その目的はナポレオンの功績をパリ民衆に知らしめること、そして然るべき時に備えてパリの軍隊にパリ民衆がボナパルト派の運動を容認していることを示すことである。しかし、現体制を動揺させることを望まない「皇后」ウジェニ（Eugénie de Montijo, 1826-1920）からの補助金に依存したヴィクトル公が⁽⁷⁷⁾、ドレフュス事件期に行った言動で注目に値するのは、前述の統領政府 100 周年の宣言のみだった⁽⁷⁸⁾。ただし、以下に見るように、すべてのボナパルト派が過激な反ユダヤ主義と距離をとっていたわけではない。

3-3 ジョゼフ・ラジーの事例

ジョゼフ・ラジー（Joseph Lasies, 1862-1927）は、カサニャックやドルナノと比較すると新参のボナパルト派の政治家・ジャーナリストである。彼は 1893 年に軍隊勤務を終えた後、ジュール県モルメス市長になった。その後、1898 年 5 月の総選挙でジュール県コンドン選挙区から出馬し、「人民投票」を求めると同時に、反ユダヤ主義的な主張を展開して当選した。1910 年までは同選挙区の、1914 年から 1919 年まではセーヌ県選出（パリ 6 区第 2 選挙区）の下院議員を務めた。反ドレフュス派として、1898 年から 1899 年には議会で多くの発言を行ったことでも知られる⁽⁷⁹⁾。彼はボナパルト派のなかでは最も過激な反ユダヤ主義者のひとりに数えられる。実際、1898 年の総選挙でラジーは有権者たちにこう述べている。

「20 年間、『共和国』という名で偽善的に装飾された現在の体制は、憎むべきユダヤ＝議会ブルジョワジー *odieuse bourgeoisie judéo-parlementaire* の便宜のために、私たちを騙し、そして搾取している。偽りの約束をして、私たちの懐を空にし、自分たちの懐を肥やすという目的のみを追求してい

(77) Laetitia de Witt, *op. cit.*, 264-271.

(78) ただし警察はボナパルト派が行動を起こそうとしていることに一定の懸念を覚えていた。APP, BA887, 24 juin 1899 et 2 janvier 1900.

(79) Jean Jolly (dir.), *op. cit.*, t. VI, pp. 2139-2140.

る。人を代えるだけでは不十分である。この無力な体制を変えなくてはならない。この体制は悪しき本能、低俗な野望のなすがままであり、コスモポリットな大投資家が率いる卑劣な搾取のための組合でしかない。ユダヤ人と金持ちを後ろ盾に隠し、苦しみながらはたらく哀れな男たちに暴政を振っているのだ。」⁽⁸⁰⁾

ラジーは、گرانが再建した反ユダヤ主義連合 *La Ligue antisémitique de la France* に加盟し、その機関紙『ランチジュイフ』*L'Antijuif* にも何度か記事を書いている。ラジーは「反ユダヤ主義連合のおかげで、農民はユダヤ人を嫌悪している。それは、農業に脅威を与えている酷い危機の唯一の原因がユダヤ人であると農民は知っているからである」として、反ユダヤ主義連合を称賛する。⁽⁸¹⁾ また、「ユダヤ人は誰かを騙すことなく昼食を取ることもできない。彼らにとっての美味な前菜なのだ」として、ロトシルト *Rothchild* が葡萄栽培に必要な硫酸銅の値段を不当に釣り上げることで、葡萄栽培者に土地を放棄させ、これをユダヤ人が奪おうとしていると主張する記事などを執筆している。⁽⁸²⁾ さらに自身の出生地であるジュール県のコミューンのウガ *Houga* で反ユダヤ主義連合の集会を開き、گرانなどとともに登壇している。⁽⁸³⁾ ボナパルト派のなかでのラジーの反ユダヤ主義の特色は、フランス人对ユダヤ人という明確な図式である。1899年9月にレンヌ軍法会議でドレフュスが再び有罪とされたことについてラジーは以下のように述べる。

「私たちの全ての苦勞と、私たちの全ての戦いが、今しがた流れた一瞬で報われた。[…]

ガリア民族 *race gaulois* が勝者で、外国人は敗者だ。

たったひとつのものが、ユダヤの金に抵抗した。軍隊である。

(80) *La Libre parole*, 4 mai 1898.

(81) Joseph Lasies, «Toujours eux», *L'Antijuif*, 27 novembre 1898.

(82) Joseph Lasies, «Juif & paysan», *L'Antijuif*, 20 novembre 1898.

(83) *L'Antijuif*, 20 et 27 novembre, et 4 décembre 1898.

ユダヤ人たちは、侮辱と中傷で軍隊を崩壊させ、破壊しようと試みた。軍隊は見事に衝撃に耐えた。

軍隊によりフランスは救われた。

あらゆる圧力に耐えて、軍法会議の判士たちは言った。ドレフュスは有罪である。そして彼と同様、彼を擁護したものも有罪であると。[…]

今までは、ドレフュス派の一味に対して私たちは守ってばかりだった。今日からは我々が攻める番である。

愛国者よ、立ち上がれ！ 名誉と自由のために戦おう！ […]

シャルルマーニュの、大革命の、ナポレオンのフランスが、悠然と体を震わせながら再び立ち上がる。

レンヌ軍法会議に名誉を！ 軍隊万歳！ フランス万歳！⁽⁸⁴⁾

ここでナポレオンは、フランス革命、シャルルマーニュとともに、フランスの偉大さの象徴として扱われる⁽⁸⁵⁾。そして、その偉大なるフランスを内部から侵食しているユダヤ人とそれに唯一抵抗する軍隊という構図が描かれる。

実際、一時はラジーがボナパルト派のオピニオン・リーダーのひとりになることもありえた。1899年11月1日、『プチ・カポラル』主幹のドルナノが列車事故に遭い右足を複雑骨折したために⁽⁸⁶⁾、11月8日、ラジーが同紙の主幹 *directeur en chef* に就任したのである（なおドルナノは紙面上では政治部主幹 *directeur politique* となっている）。ラジーは『プチ・カポラル』の主幹に就任して最初の号で、ドリュモンを「その預言者の才能は私たちの人種 *race* を救うであろう」と評し、またドリュモンの記事を「タキトゥスの簡潔さがミシュレの華々しさと競い合う」と褒め称える。続けて、ボナパルティストの他に、

(84) Joseph Lasies, «Vive la France !!!», *Le Petit caporal*, 10 septembre, 1899.

(85) 他にもラジーは「軍事精神 *esprit militaire*」こそが、フランスが歴史の中で継承してきたものなかで最も貴重なものであり、フランスの偉大さを築いたものだとする。そして、この「軍事精神」の象徴として、ウエルキングトリクス、シャルルマーニュ、アンリ4世などとナポレオンを並べている。Joseph Lasies, «Spes, Fides», *Le Petit caporal*, 21 septembre 1899.

(86) P. Halary, «L'accident de M. Cunéo d'Ornano», *Le Petit caporal*, 3 novembre 1899.

いずれもナショナリストであるロシュフォール (Henri Rochefort, 1831-1913), ジュデ (Ernest Judet, 1851-1943), ミルヴォワ (Luicien Millevoeye, 1850-1918), コッペ (François Coppée, 1842-1908), ルメートル (Jules Lemaitre, 1853-1914), テイエボー (Georges Thiébaud, 1855-1915), シヴトン (Gabriel Syveton, 1864-1904), バレス (Maurice Barrès, 1862-1923), アベール (Marcel Habert, 1862-1937) などに言及し、現体制とユダヤ人を批判する。そして、「消えることのない信念とともに、決して弛むことなく、あらゆる社会の基盤と考える以下のものを救うために、私たちは戦い続ける。神 Dieu, 旗 Le Drapeau [国家, 特に軍隊の象徴], 人種 La Race !!!」と宣言した。ここでは、ドリユモンへの深い共感とともに、ナショナリストとの共闘の意志が明確である。宗教的あるいは経済的な反ユダヤ主義に加えて、「race」への言及がラジーには見られることが特徴的である。

しかし、ラジーの主幹就任から約2ヶ月後の1900年初頭、『プチ・カポラル』の第一面に「反ユダヤ主義と『プチ・カポラル』」という記事が掲載された。その後の経緯からこの記事はラジーの不在を利用して組まれたと考えられる。この記事は、日刊紙『リーブル・パロール』に書かれたフランスの歴史におけるユダヤ人の影響（の過大評価や捏造）に対する反論であり、おもに第二帝政期の記述に関するドリユモンへの批判となっている。この記事を書いたアラリ (Halary, 生没年不明) は、ドルナノの「私たちはナポレオンの旗を反ユダヤ主義の口論に巻き込むことはできない」や「ナポレオンにとってカトリシズム、プロテスタンティズム、ユダイスムは人間精神の表明である」などの文章を引用する。これはドリユモンへの反論というかたちをとった、当時の主幹ラジーへの批判に他ならない。⁽⁸⁹⁾

(87) ミルヴォワとティエボーはボナパルト派出身のナショナリスト。愛国者同盟のメンバーのほか、フランス祖国同盟 (la Ligue de la patrie française) のメンバーが含まれる。祖国同盟については、Jean-Pierre Rioux, *Nationalisme et conservatisme. La Ligue de la patrie française, 1899-1904*, Paris, Beauchesne, 1977.

(88) Joseph Lasies, «Lettre de M. J. Lasies», *Le Petit caporal*, 8 novembre 1899.

(89) P. Halary, «L'antisémitisme et le "Petit caporal"», *Le Petit caporal*, 5 janvier 1900.

この記事の掲載の結果、ラジーは『プチ・カポラル』の主幹を辞職した。ラジーは『プレス』*La Presse* のインタビューを受け、経緯を説明している。彼によると、辞職したのは先述の記事が「私の反ユダヤ主義的考えの明白な否認」であり、この記事に疑義を電報で申し立てたが同意されず、自分が送った記事が掲載されなかったからである。そして、パリに戻った際に暴力的な反ユダヤ主義的言行をしてはならず、何名かの著名なユダヤ人を攻撃することを慎むように要請されたと言う。彼は、反ユダヤ主義は統治のプログラムでないと述べるドルナノとの齟齬を認めた上で、自身を当選させた有権者を裏切ることではできないのだと説明する。⁹⁰

ここで興味深いのは、ヴィクトル公の宣言に見られるような「国民の和解」というボナパルト派の政策よりも、デルレードへの共感をラジーは重視していることである。ラジーは自身が辞職したことで『プチ・カポラル』が「純粋にボナパルト派の新聞になった」と説明している。これは、ヴィクトル公の宣言に象徴されるボナパルト派の政策が、排外主義的な反ユダヤ主義と距離をとっていることを十分に認識しているからである。実際、純粋なボナパルト派新聞となることは、「勇敢なデルレードの大義を擁護するには妨げになる」とラジーは述べている。彼によれば、自身は「なによりもまず反ユダヤ主義者で、人民投票派」であり、政界に足を踏み入れてからユダヤ人と独占者に対する最も暴力的なキャンペーンを張ってきたために、それを弱めることはできない。一方で、帝政やナポレオン、ヴィクトル公と自身の政策との関連にラジーは言及しない。そして、『プチ・カポラル』のメンバーとの関係は良好なままだとしながらも、彼らが「ユダヤ人を労わるのは無益な善意であり、ユダヤ人には哀れみよりも恐れを抱いた方が良くとすぐに認識することを望む」と締めくくった。⁹¹ 実際、ラジーはこの騒動の後もしばらくは反ユダヤ主義的言動を続けている。⁹²

(90) «Une évolution du bonapartisme», *La Presse*, 12 janvier 1900.

(91) *Ibid.*

(92) 例えば、ラジーは1901年6月にドリュモンなどともにアルジェでの反ユダヤ主義者の講演会に登壇している。*L'Antijuif*, 9 juin 1901.

一方で、ドルドーニュ県選出のボナパルト派下院議員で、日刊紙『プチ・カポラル』の経営顧問委員長 *Président du conseil administration* のナポレオン・マ一ニユは、同時期にラジーを以下のように痛烈に批判した。

「反ユダヤ主義は、私が共有しているものであるがゆえに、ひとつの意見として尊重している。独占者らによりなされた、全体の富が犠牲になるほどの並外れた投機に国が苦しんでいるがために、国全体は反ユダヤ主義的なものだ。ひとりの裏切りものの名誉回復のための反軍隊的な憎むべきキャンペーンを国は拒絶したがために、国は反ユダヤ主義的なものだ。

しかし、そうはいつでも反ユダヤ主義は単なる感情でしかない。反ユダヤ主義は統治のプランではない。

反ユダヤ主義は役に立つ道具にはなりえるが、目的ではない。

ドリユモンにこのことについてどう思うか尋ねてみよ。

秩序の側のあらゆる政府は、反ユダヤ主義をやめさせるだろう。なぜなら、秩序の側の政府はユダヤ人を然るべき地位に置き直すことで、反ユダヤ主義を取り除くのだから。[…]

『プチ・カポラル』が、誠実で忠実な機関紙であるという名誉に与るナポレオン公 [ヴィクトル] は、この特権階級との戦いを決定的なものだとお認めになることはできない。この戦いは彼が権力の座についた後にはもう存在しないものなのだ。[…]

ナポレオン公は人民によって、第二帝政の功績を日ごとに懐かしむフランス全体によって、帰還するのである。

ナポレオン公は王党派が保持したがっているようなユダヤ人、フリーメーソン、議会に囚われていない。

彼は人民の意思、すなわち人民投票しか認めない。

君 [ラジー] は何を恐れているのか？

シナゴークの資金に買収されていると人々に非難されることか？」⁽⁹³⁾

マーニュもまた反ユダヤ主義を共有し、共感を表明する⁽⁹⁴⁾。さらには、証拠偽造を自白した上に自殺したアンリの寡婦のための募金モニュマン・アンリの寄付者名簿には、ラジーとともにマーニュの名前も確認できる⁽⁹⁵⁾。しかしマーニュは、反ユダヤ主義は、「感情でしかなく」、「統治のプラン」ではないと述べる⁽⁹⁶⁾。反ユダヤ主義は、現状の共和政が、「ユダヤ人」が特権階級に居座ることを許しているために、フランスを覆っているのであって、この状況はナポレオンの帰還によって解決される問題である。実際この騒動の直後、ドリュモンはボナパルト派と「反ユダヤ主義」の「決別」に批判的に言及した⁽⁹⁷⁾。

この記事の公開と同時期に『プチ・カポラル』の編集部メンバーが、ヴィクトル公が住むブリュッセルに向かっている。彼らは同紙が人民投票の政策を明白に強調していることや、ラジーが導こうとした反ユダヤ主義路線を取り除こうとしている努力を認めてくれるようにヴィクトル公に主張した。そして療養中のドルナノは、ヴィクトル公への手紙で以下のように述べている。

「私はまだ横になっていますが、しかし病床ではなく、長椅子で横になっています。というのも、右太ももの骨は接合しているのですが、地面に足をつけることを認めてもらうまでには安定していないためです。筆をとるのに苦労しますが、私の同僚であるナポレオン・マーニュが行おうとしている尽力は、殿下によって励まされているのだとどうしても申し上げたいのです。しかし、ラポルド伯爵は（当然のことながら）[この尽力を] 思いとどまらせようとしています。ラポルド伯爵はあやうく、ラジーのよう

(93) Napoléon Magne, «Lettre de M. Napoléon Magne à M. Lasies», *Le Petit Caporal*, 11 janvier 1900.

(94) Napoléon Magne, «Les ennemis de la France», *Le Petit caporal*, 11 août 1898.

(95) Pierre Quillard, *Le monument Henry. Listes des souscripteurs classés méthodiquement et selon l'ordre alphabétique*, Paris, P. V. Stock, 1899, p. 130.

(96) アンドレの博士論文ではマーニュはラジーとともに、ドリュモンに劣らぬ強固な反ユダヤ主義者として挙げられているが、この点で全く同列には扱うことはできない。Patrick André, *op. cit.*, p. 86.

(97) Edouard Drumont, «Le prince Victor et les juifs», *La Libre Parole*, 12 janvier 1900.

(98) AN, F7 12867, 27 janvier 1900.

にマーニュに道を誤らせるところでした。ボナパルト派の政策を掲げる唯一の日刊機関紙である『プチ・カポラル』は、ナポレオンの政策よりも、ラジーやドリュモンの政策を優先するならば、すぐに消滅してしまうでしょう。⁽⁹⁹⁾」

ラジーも、ドルナノも、ナポレオン・マーニュも反ドレフュス派である。しかし、後者の二人にとって「ナポレオンの政策」に反ユダヤ主義を取り込む余地はない。ただし、こうしてラジーの路線は排除されたものの、『プチ・カポラル』は資金難に喘ぎ、この騒動から程なくしてドルナノ中心の編集グループは解散せざるをえなくなっている⁽¹⁰⁰⁾。結局、ボナパルト派がドレフュス事件で積極的な行動を起こすことはなかった。一方で、1904年にはラジーも、ある集会で反ユダヤ主義に時間を費やし過ぎたと後悔を表明している。ナショナリストという新たな右翼勢力の拡大をもたらしたドレフュス事件は、ボナパルト派内部の不一致を露呈させ、混乱だけを残して収束へ向かったのである。

(99) ラボルド (Alexandre de Laborde, 1853-1944) はパリ軍事総督府参謀本部に勤務する軍人で、考古学者としても知られる。祖父 (アレクサンドル) と父 (レオン) は、考古学者・政治家として知られ、ナポレオン家と近い関係にあった。この家柄のためボナパルト派組織に関係し、1896年1月には主に選挙戦の準備のためのコミテ (通称ラボルド・コミテ Comité Laborde) の指導者となった。この組織は1897年に全国人民投票派コミテ Comité national plébiscitaire に改組される。Tonnelat Ernest, «Notice sur la vie et les travaux du comte Alexandre de Laborde, membre de l'Académie», *Comptes rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres*, N. 3, 1947. pp.420-443; Patrick André, *op. cit.*, t. 1, pp.86-88.

(100) AN, 400 AP 183, Lettre de Gustave Cunéo d'Ornano au prince Victor, 19 janvier 1900.

(101) *Le Petit caporal*, 1^{er} mars 1900. 同様に、この1ヶ月前にはナポレオン・マーニュはボナパルト派元下院議員のベルジェ (Eugène Berger, 1829-1903) に対して、パリでのボナパルト派としての姿勢と選挙区での保守派としての姿勢の間の開きに苦しんでいることと、『プチ・カポラル』で1年間活動して疲弊したことを理由に、新たな組織への加入を断っている。AN, 400 AP 200, Lettre de Napoléon Magne à Eugène Berger, 8 février 1900.

(102) AN, F7 12867, 16 juillet 1904.

IV おわりに

ボナパルト派のほとんどが反ドレフュス派であることはいまいちど確認しておく。⁽¹⁰³⁾ 彼らは皆、一部の少数派が影響力を持ち、多数派の利益（フランス人の大多数が信仰するカトリック）が蔑ろにされているという世界観を表明し、この状況を招いている現体制に批判を加えるという点で共通する。

しかし、カサニャックであれドルナノであれ、彼らにとって最大の問題は、ユダヤ人の存在そのものではなく、現状の議会共和政という体制である。カサニャックはそのために共和政自体の打倒を支持し、⁽¹⁰⁴⁾ ドルナノは「ナポレオンの統治」の再建を訴える。一方で、ラジーは人民投票を重視しつつも、「ナポレオン」をフランスの偉大さの象徴として位置付け、ユダヤ人に代表される少数派を、フランスを内部から蝕む存在として規定する。しかし、『プチ・カポラル』からのラジーの「追放」に見られるように、ラジーの路線はボナパルト派内部で優勢になることはなかった。ドレフュス事件を通じて、ボナパルト派は全体として、組織として大々的に行動することはできず、ナショナリストの波に一部が加担し、大した成果を得ることなく、逆に内部の対立を表面化させただけだった。

ドレフュス事件期のボナパルト派たちの対応には、メナジェが指摘した、排

(103) エリック・カン反ドレフュス主義を、裁判結果に基づき「ドレフュス事件は存在しない」と否定し続けた政府や共和派による「穏健な反ドレフュス主義」と、ドリュモンやロシュフォールなどの反政府的で暴力的な「極端な反ドレフュス主義」とに区別している。しかし、ジャン・ギファンによるブルターニュ地方でのドレフュス事件研究も示すように、それら2つ以外にも、さまざまな立場の反ドレフュス主義があったと言える。Eric Cahm, *The Dreyfus Affair in French Society & Politics*, London and New York, Longman, 1996, pp. 86-88. (フランス語からの翻訳, Id, *L'Affaire Dreyfus*, Paris, Livre de Poche, 1994); Jean Guiffan, *La Bretagne et l'affaire Dreyfus*, Rennes, Terre de Brume, 1999.

(104) カサニャックは「少なくともフランスでは、今日まで最悪の君主政のほうが最良の共和政よりもよかった」と言う。Paul de Cassagnac, «La république plébiscitaire», *L'Autorité*, 13 janvier 1900. また、帝政とは近代的君主政であり、共和政とは相反すると述べるほか、国民による大統領の直接選挙というデルレード的な「人民投票」は「偽の人民投票」であり、「完全な人民投票」とは、国民が政体を選択するものであると述べている。Id, «Le plébiscite intégral», *L'Autorité*, 20 août 1900.

外主義的ナショナリズムとボナパルティズムの間のジレンマが顕著に表れる。⁽¹⁰⁵⁾ 人民投票による国民の和解という神話に立つボナパルト派と、ユダヤ人などの国民の一部を「国内の敵」と捉え、その排斥を主張する極右ナショナリストとは、本質的に相入れないのである。この点で、「革命の遺産」を普遍化しようとする共和派左翼のナショナリズムから排外的な右翼のナショナリズムへ、という世紀転換期のナショナリズムの変容のさなかで、⁽¹⁰⁶⁾ 人民投票と王朝を土台とする「右翼」であるボナパルティズムは逡巡せざるをえなかった。排外主義的な言動を厭わないナショナリストの拡大という新たな政治状況に直面したボナパルト派の衰退に関する危機感は、ドルナノがある集会で発した以下の言葉によく表れている。

「我々にはゲランがいた。彼らが我々を取り込んでしまった！ 我々にはデルレードがいた。⁽¹⁰⁷⁾ 彼らが我々を取り込んでしまった！ うんざりだ！ これらとは手を切らなくてはならない。なぜならこの国はカエサル支持者 *césarien* で人民投票支持者 *plébiscitaire* なのだから！」⁽¹⁰⁸⁾

ただしラジーのような、ボナパルティストでありつつ、極右ナショナリスト

(105) Bernard Ménager, *op. cit.*

(106) René Rémond, *Les droites en France*, Paris, Aubier, 1982, pp.153-158；ミシェル・ヴィノック（川上勉・中谷猛監訳）『ナショナリズム・反ユダヤ主義・ファシズム』藤原書店、1995年、51-56頁。

(107) ボナパルト派の多くがデルレードの「人民投票型の共和国」に共感を寄せていたのは事実であり、愛国者同盟に参加するものも少なくなかったことは先行研究でも指摘される。ただし、クーデタの失敗やその後の逮捕と国外追放は幻滅を掻き立てた。あるボナパルティストは集会で「デルレードは、人民投票の観念と原理をひとりで体現しようとしたことで、あまりに好き勝手に振る舞い、あまりに遠くへ行ってしまった」（AN, F7 12867, 28 juillet 1900）と失望を述べている。またヴィクトル公は、デルレードが真の愛国者でプログラムも自分たちと近いと述べつつ、「この状況下では政治的に大した戦術家ではなかった。まず道に迷い、そして擁護しているプログラムを危うくした」と評している（AN, F7 12867, 19 janvier 1900）。またデルレードに対するボナパルト派左派からの影響も指摘されている。ポール・デルレードおよび彼が指揮する愛国者同盟とボナパルト派の組織的・思想的な関係の検討は今後の課題である。

(108) APP, BA907, 7 mars 1899.

のように、国民の一部を「内部の敵」として攻撃するものを無視することはできない。実際、多くのボナパルト派が共感を隠さない愛国者同盟指導者ポール・デルレードによる1899年2月のクーデタの試みに関しても、少ないながら数名～数十名程度のボナパルト派が参加していた。また極右ナショナリスト組織内部にもボナパルト派あるいはボナパルト派出身のもの⁽¹⁰⁹⁾が一定数存在した。そして、ボナパルト派内での排外主義的傾向を見せる人々は、ドレフュス事件の収束とともにボナパルト派内部から完全に消えたわけではない。それは、第一次世界大戦前夜、暴力的な直接行動を厭わない極右リーグであるアクション・フランセーズの拡大の影響を受けたボナパルト派青年組織において、再び姿を現すことになるだろう⁽¹¹⁰⁾。

【付記】

本論文の校正にあたって、同僚の園部裕子氏にご助言いただいた。記して謝意を表する。

(109) Bertrand Joly, *Paul Délouède, op. cit.*, p. 290 ; Laetitia de Witt, *op. cit.*, pp. 254-257.

(110) Shoma Yuasa, «Le mouvement des jeunes bonapartistes et l'Action française avant la Première Guerre mondiale (1909-1914)», *WASEDA RILAS JOURNAL*, no. 9, 2021, pp. 233-245.